第１０４回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成２６年４月１４日提出）

アクティブラーニング事例報告会

【趣　旨】

全学モジュール科目では、アクティブラーニングを積極的に導入する試みがなされています。この事例報告では、各分科会で４名の授業者から苦労した点・失敗した点も含めてざっくばらんに話題提供していただき、来年度に向けて授業改善の方法を検討しました。

【対　象】　全教職員（非常勤を含む）・ＴＡ

【日　時】　平成 26 年 3 月 7 日（金）14:00～16:15

【場　所】　分科会Ａ：教育学部 21 番教室　　分科会Ｂ：教育学部 22 番教室

【内　容】

分科会Ａ（自然科学系）・分科会Ｂ（社会科学系）に分けて、各報告 20 分および質疑 5 分で 4 件の報告を行い、その後全体討論を 20 分行いました。

◆　分科会Ａの報告者と科目名　◆

田中 俊幸 准教授（工学部）　「科学と技術の安全・安心」
長島 雅裕 准教授（教育学部）　「身のまわりの科学」
柴田 裕一郎 准教授（工学部）　「暮らしと情報の数理」
深見 聡 准教授（環境科学部）　「地域の環境を考える」

◆　分科会Ｂの報告者と科目名　◆

山岸 賢一郎 准教授（教育学部）　「教育原理論」
植木 とみ子 先生（非常勤講師）　「ジェンダーとことば」
川越 明日香 助教（大教センター）　「多文化理解とことば」
丹羽 量久 教授（情報センター）　「情報と社会」

【主　催】　教務委員会

【企画・実施】　評価・FD 教育改善専門部会

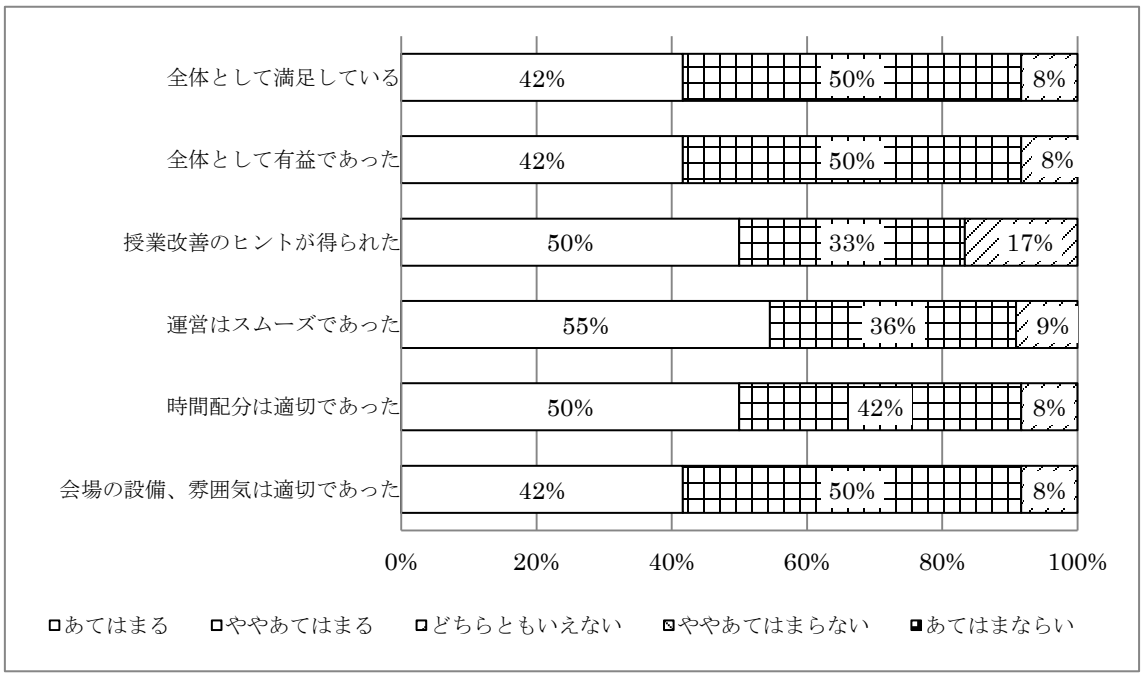
【参加者】

17 名（受講証発行対象者：17 名）

所　　属	人　数
教育学部	1
経済学部	1
医歯薬学総合研究科（保系）	3
医歯薬学総合研究科（歯系）	2
工学研究科	4
水産・環境科学総合研究科（環境）	2
多文化社会学部設置準備室	1
国際教育リエゾン機構	1
核兵器廃絶研究センター	1
地域教育連携・支援センター	1
計	17

分科会Ａ

【参加者からの評価】（回答者：１２名）



○　今回参加なさって、何か感想や意見がありましたら、ぜひ率直にご記入下さい。

- 有益な情報が得られた。今後の参考にします。
- アクティブラーニングに様々なやり方があることを知ることができました。
- 大変有意義な報告会だったと思います。参加者が少ないのが大きな課題。

・ 参加者をいかに増やすか、という点が問題。
・ 専門分野との関連性の低さが出席者の少なさになっている？
・ 参加者が少ない。興味のある講義方向があった。
・ クリッカー利用法について、ＩＤとの対応の仕方が役に立った。グループワークの効果について、疑問点も存在することがわかった。
・ アクティブラーニングに対する意識の向上につながった。他の先生方がどのような点で工夫し成果があるか、一方で悩みを有しているかを知ることができた。また、科目としての専門性の担保と、学生の参画機会（コメントや議論）を重視しすぎる余りに講義全体の内容が薄まらないかが悩みどころです。
・ 今回というわけではないのですが、アクティブラーニング導入というゴールを課しても浸透はなかなか難しいと感じています。授業改善をするという雰囲気の醸成と同僚との議論の結論として、アクティブラーニングとなると良いのですが。

○ 内容面・運営面のいずれでも、何か改善を要する点にお気づきでしたら、ご記入下さい。
・ 参加者を増やすため、参加を必修とする方法とかはないでしょうか？
・ 参加者が少ない。今後増やすための方策が必要。
・ 事前告知メールを見逃していましたので、２回以上案内メールをいただければと思います。

○ 今後、ＦＤ・ＳＤのテーマや実施方法などに関して何かご希望がありましたら、ご記入下さい。
・ 従来型自学自習の実質化という意味でのアクティブラーニング
・ 教員の研究成果を採り入れた授業展開。既存のホームページ、新聞記事を活用した授業展開。

【総　括】

工学部の田中先生は、工学的見地から社会で利用されているインターネット社会におけるセキュリティー対策や電磁波に対する対策等についての授業を実施した結果の報告を行った。授業はグループ分けして参加する形で、3 回の授業の後、4 回目に発表会という形をとったとのことであった。クリッカーを多用し、学生参加型の授業を実践しており、効果が上がっているようであった。

教育学部の長島先生は、物理学が専門であることから、すでに知っている身近な物理事象に関するテーマについてグループワークをさせる形の授業を行っており、講義、実験、レポートという 3 つのセットを基本形態とした授業について紹介した。レポートは 10 回以上提出させ、学生参加型の授業となるよう工夫されていた。

工学部の柴田先生は、生活の一部となっているネット検索にも応用されているアルゴリズムの基礎を講義及び演習で学ばせる形をとっており、学生の参加がかなりあるものの、

従来の授業形態主体で実施しているとのことであった。クリッカーは使用を試みたが、多人数で欠席者が多く、管理が難しく使用しづらいとのことであった。

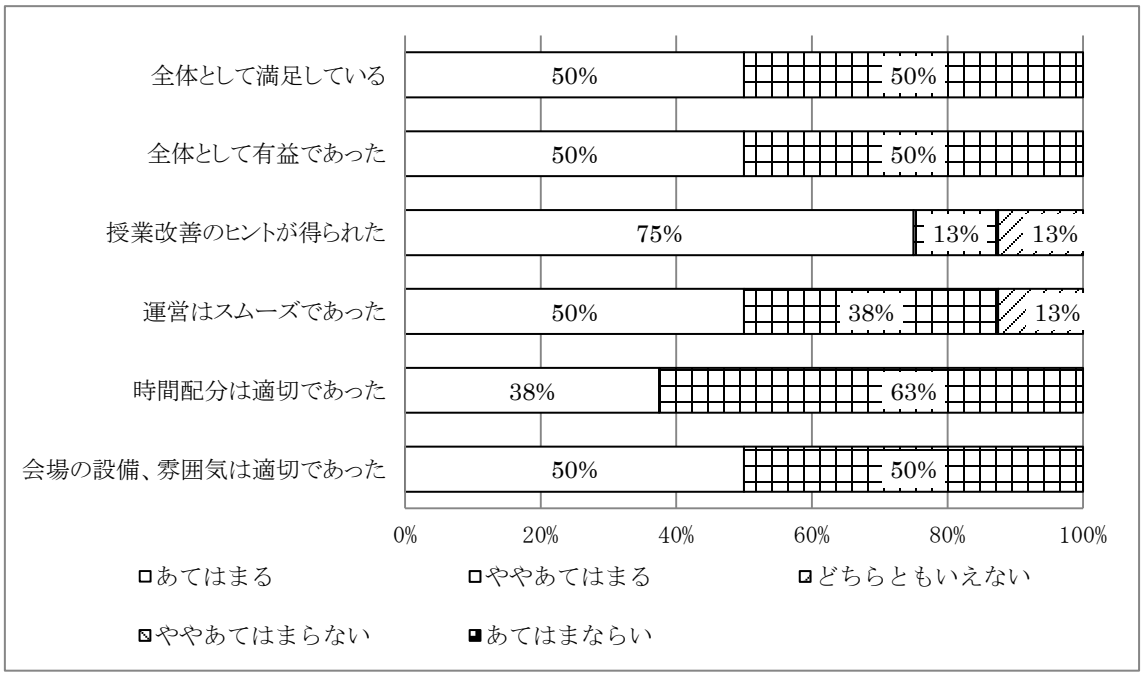
環境科学部の深見先生は、唯一の文系の先生であり、代理発表とのことであったが、地域経済学を視点とした循環型社会に関する授業の報告を行った。授業はあらかじめ班分けして、教員側が準備して事前に知らせたテーマについて毎授業 4 人が報告し、報告者 1 人について 2 人がコメントをするようあらかじめ指名し、これを繰り返したとのことである。

はじめの 3 人の先生方は、現代社会で不可欠な技術や、当たり前のように思っているまたは誤解されている事象等について、その根底にあるサイエンスを学生自身に考えさせる教育を実践していると感じられた。また、最後の報告は循環型社会について、アクティブラーニングを通して学生が「知っている」ようになるのではなく、「評価する、評価できる」ようになることを目指していると感じられ、いずれも興味深く、参考になった。発表後には全体討論となり、多人数で欠席者が多い授業でのクリッカー活用のヒント、アクティブラーニングの解釈、本 FD の参加者が極めて少ないことに対する改善策等について活発な議論がなされた。

（文責：池田 通）

分科会Ｂ

【参加者からの評価】（回答者：８名）



○ 今回参加なさって、何か感想や意見がありましたら、ぜひ率直にご記入下さい。

- 様々な実践例を聞いて非常に参考になった。又、個別の事例だけでなく、大学全体でどのようにとりくんでいくかというところにまで討議が進んだので、そのことを踏まえた上で、自分がどうするのか考えていきたい。
- モジュールの在り方や教養教育の意味等を考えさせられる報告会でした。
- 具体的にアクティブラーニングがどのようなものであるかについて理解することができた。しかし、そもそも「アクティブラーニング」というものが何なのか（どのような構成要素が含まれるものなのか）の定義を知りたいと感じた。教育目標によってアクティブラーニングがよいものとあわないものがあると思うが、そこら辺の条件も分析すべきではないかと感じた。
- アクティブラーニングについてもう少し考えてみよう、という気になりました。
- 植木先生のプレゼンテーションはとくに有益でした。
- いろいろと参考になりました。参加者がもう少し多いと良かったと思います。
- アクティブラーニングとは本当は何なのか少しわかりました。

○ 内容面・運営面のいずれでも、何か改善を要する点にお気づきでしたら、ご記入下さい。

- 思ったよりも参加者が少ないのが残念だと思いました。「専門科目を優先させたいので教養教育は控えて・・・」という考えの教員にこそ参加して欲しいと思いました。

・ 事前に資料を配布して頂ければ理解しやすくなると思います。
・ 報告会の発表のお話、もう少し早めにいただけたら・・・と思います。（ご無理のない範囲で）

○ 今後、ＦＤ・ＳＤのテーマや実施方法などに関して何かご希望がありましたら、ご記入下さい。
・ 教授のプロセスと同時に大学（学部）として何を身につけさせたいかという点について具体的に示すことについても必要なのかと感じた。

【総　括】

本 FD の分科会 B では、25 年度に開講した社会科学系のモジュールⅠ・Ⅱのうち、４名の先生方から事例を報告していただき、活発な議論が行われた。

４名の先生方からは、アクティブラーニングを導入するに当たり、工夫した点、苦労した点、今後の課題等について個別具体的に説明を頂いた。学生の動機づけのために流行歌・諺・教科書等の身近な材料を活用し気づきを促す方法、レポートやプレゼンテーションの評価項目やポイントを纏めたルーブリックを学生に提示し改善の道筋を具体的に示す方法、更には講義主体の授業において授業ログシートを活用し学生の参加を促すとともに理解度を高める工夫等について説明があった。

参加者の意見には、「様々な実践例を聞いて非常に参考になった。」、「具体的にアクティブラーニングがどのようなものであるかについて理解することができた。」というものもあり、非常に有意義な FD であったと言える。

一方で、アクティブラーニングでは中途半端な議論に終わり十分な知識が身につかないのではないか、教員や学生に過度の負担となるのではないか等の懸念も示された。また、アクティブラーニングを全ての科目で導入する必要があるのか、モジュールではアクティブラーニングを導入している科目と講義中心の科目を連携させることはできないか等の論点も提示された。参加者の意見では、「教育目標によってアクティブラーニングがよいものとあわないものがあると思うが、そこら辺の条件も分析すべきではないかと感じた。」という現行のモジュールに対する疑問も示された。

参加者のアンケート結果を見ていると、全体として満足しているかの設問に対し、「あてはまる」（50%）、「ややあてはまる」（50%）をあわせると、参加者は全員満足していたことが確認された。また、全体として有益だったかの設問についても「あてはまる」（50%）、「ややあてはまる」（50%）であり参加者全員が肯定的な評価をしている。工夫した点、苦労した点、改善点等の具体的な事例報告にとどまらず、アクティブラーニングの意義やモジュールの在り方・改善策についても幅広く討論が行われたことが参加者の高評価の理由であると推察される。一方、アクティブラーニングの定義・目的・方向性やモジュールの在り方については、多くの教員が問題意識を持つべき内容であることから、参加者が少なかったことが非常に残念であり、参加を促す工夫が必要であると考えられる。

（文責：谷口 眞司）